

四十年の人生を振り返って最も心に残っているのは、九年前、郷里の島根県益田市ますだで会計事務所を経営していた父が急逝きゅうせいしたときのことです。その日から、私の人生は大きく動き出しました。

東京の税理士法人に勤めていた私は地元に戻り、父の事務所を引き継ぐことになりました。経営の勉強をしたことがない私に、経営者が務まるのだろうかという不安を抱えながら、未知なる世界に飛び込むような気持ちだったことを覚えています。

私が益田に戻り、初めて社長室に入ったとき、机の上に「十年日記」というものが置いてありました。それは、二〇〇一年から二〇一〇年までの日記が一冊にまとまっているもので、例えば四月十七日のページを開くと、十年分の四月十七日の出来事が分かるのです。

そこには父の字がびっしりと書かれてあり、二〇一〇年十月十二日が最後の日記となっていました。父と仕事をしたことがないまま後を継いだ私にとって、十年分の出来事と父

## 父からの贈り物



あんのひろあき

**安野広明**

株式会社ビジネスプラン 代表取締役

昭和54(1979)年、島根県益田市生まれ。平成18年、公認会計士に登録。22年に安野公認会計士・税理士事務所を開業し、現在に至る。

の思いがつつづつてあるその日記は、経営の「虎の巻とらまゝ」のような存在です。

そして、同じ年の十一月のある日、大きめの郵便物が届きました。封を開けると、父が亡くなる前に注文していた二〇一一年からの「十年日記」が、まささらな状態で入っていました。表紙には父と私の同じイニシャル「H・A」が入っていて、私があるまま使える形で手元に届いたので。

その日記を見たとき、父が私に「広明、これから社員さんと一緒に、自分の十年史を刻んでいきなさい」というメッセージを贈ってくれたのだ、自分はここに導かれたのだと強く感じました。

あれから九年が経ち、私も経営者として十年目になります。二〇二〇年の日記を埋めれば、父から託された「十年日記」が完成します。

とはいえ、理想の姿にはほど遠く、一人前の経営者になるまで、まだまだ分かりそうです。これからは父からの贈り物を思い出しながら、経営者としての自分史を刻んでまいりたいと思います。